民話と音楽による教科横断型学習の研究

―地域連携による表現活動と総合的な学習に着目して―

久保田　葉子

１．　はじめに

近年、インターネット上に存在する大量のテキストデータをAIが学習することにより、人間と同じように自然な文章を生成して質問に回答したり、翻訳や要約などの課題に対応したりするChatGPTが利用されるようになり、正しい情報の見極めがより困難な時代となっている。だからこそ、検索により得た情報が正確であるかを見極める知識と注意深さが必要となる。どのような事柄も簡単に調べられる時代だが、筆者は情報を享受するだけでは本当に分かったことにはならないのではないかと危惧している。人との交流や自ら足を運んで探し求めた情報からしか得られない、五感が刺激され知的好奇心が高まる学習活動からむしろ遠のいてしまうのではないかというおそれも感じている。これからの時代には、自ら課題を発見し、問いを立てて探求し、仲間と協働して学びを深め、その成果を表現する経験がより重要になるのではないか。探求的な学習を展開するためには、１）興味関心があることを基に学習者自身が主体的に課題設定できること　２）情報収集する中で予想外の方向に関心が広がっても没頭して調べ、その成果を整理・分析する十分な時間を確保すること　３）教科横断的な視点で探求すること　４）学習者が学内外のさまざまな人とかかわることで実体験を増やし、自己表現の場をつくることが有効だと考えた。このような視点で、将来、教壇に立つことを希望している本学の学生たちと共に世界の民話と音楽を児童に紹介するプロジェクトに取り組んだ。研究及び成果のまとめにはICTを活用すると共に、コンサート形式で世界の児童文化財や音楽の魅力を発表することにした。

２．　研究目的

教科横断型学習の有効性について、世界の民話と音楽を紹介するコンサートの企画制作の実践から考察する。取り上げる分野は「国語」「音楽」「外国語」「地理」「歴史」「食文化」である。

情報を収集して課題に対する答えを導き出す力や、外国の文化への関心は、さまざまな年代の人とのかかわりや意見交換、自分の考えを他者に伝える活動を通して育まれるのではないか。教職を目指す学生が地域連携による学習活動に参加することによって、文化や社会に対する見方にどのような影響があるのか明らかにする。

３．研究方法

2023年4月から「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」というテーマで文献調査を開始した。7つの国の民話を選び、物語の内容を理解して音読ができるように練習し、取り上げた国の歴史・言語などを調べた。選択した国の音楽（歌）もあわせて紹介することで、言葉の持つ響きやその国の人が大切にしている価値観にも迫れるのではないかと考え、できる限り原語で歌うことを目指して選曲をした。

このプロジェクトに参加した児童教育学科の学生は、本を読む楽しさを子ども時代から知っており、児童が本に親しむきっかけをつくりたいと希望していた。そのため、連携市の小学校及び公共図書館において読み聞かせを実践することにした。

対面での発表に加えて民話と音楽を収録・編集し、著作権を持つ出版社への利用許諾の手続きを経て、2023年12月以降、7本の動画作品として公開した。一年間の研究の成果発表としては、2024年3月27日に和光市民文化センターサンアゼリア小ホールでコンサートを予定している。これらの企画制作を通して大学生と教員が外国の文化について調査し、その魅力を他者に伝えようとする過程で直面した課題を整理し、分析する。

世界の民話と音楽について総合的に学んだ学生が、地域連携による学修をどのように受け止めたかについては質問紙による調査を行う。

４．結果と考察

４－１　世界の民話と音楽

小学校/特別支援学校の教員を目指す学生たちは、児童文化財への理解を深め、自分自身が児童の感性を豊かに育む読み語りができるようになりたいと考えて企画制作を開始した。公共図書館で開催されている読み聞かせの催しを検索して見学に行ったり、小学校の朝の会で読み聞かせのボランティアに参加したりと、学生は情報収集から学外の方との交渉まで積極的に進めていった。小学校の教室における民話の読み語りにおいては、子どもたちとの物理的な距離が近いことによって物語の世界を共有しやすい面があると思われるが、学生は実践を通して空間の広さや参加者によって間のとり方や朗読のテンポなどを変える工夫が必要であることを理解した。

民話の研究に加えて学生たちは特技を生かして歌や楽器を用いた演奏も公共ホールで発表することを希望した。学生たちは、統一感を考慮して民話と同じ国の音楽を選びプログラムを構成することにしたが、物語の内容から選択された７か国（ブラジル、アルゼンチン、ドイツ、ウクライナ、ポルトガル、ベルギー、ブルガリア）の音楽がすぐに思い浮かぶわけではなかった。時間をかけてそれぞれが音源・書籍・作品辞典・楽譜に当たり、ホワイトボードに持ち寄った案を書き出して、変化に富んだプログラムになるよう選択していった。世界の民謡やわらべうた、器楽アンサンブル、クラシック音楽について調べる過程で出合った音楽はどれも魅力があった。

学生と筆者は、学外で成果発表することを想定していたため、テーマと概要を企画書にまとめて、協働主催者である新座市教育委員会と公益財団法人和光市文化振興公社に希望を伝え、打ち合わせを進めていった。これまでに上級生も連携市におけるコンサートを開催していたため、企画の観点やスケジュールの組み方について参考になる部分も多かった。今回は民話に取り組むため、新たに図書館とも共催企画を実施することになった。静かに本を読みたい人が集まる図書館とコンサートホールの違いを意識して、使用楽器の音量や催しの長さを考慮しながら複数の公演プログラムを並行して準備した。

企画制作を担当した２名の学生と筆者は、自分たちが扱える楽器を確認して楽譜を探し、アレンジを試みた。一人で６種類もの楽器を演奏する学生がおり、高等学校までの部活動で仲間が演奏しているのを見て複数の楽器を独学で習得したと聞き驚いた。楽器は幸いなことに学内の吹奏楽部から借りることができた。3 名では編成が小さいため、学内で楽器を演奏する教員や友人たちに器楽・合唱に協力してもらい、編成に合うようさらにアレンジを加えた。著作権の確認と手続きも早い段階から行った。実技に関してはプロの演奏家よりヴォイストレーニング（オペラ歌手の北澤幸氏）とスネアドラム（打楽器奏者の吉岡理菜氏）の指導を受け、学生が日頃の自主練習に生かせるようにした。朗読については本学職員の久保裕子氏、元小学校教員の小城正重氏より助言を得たことで新たな目標ができ、見通しを持ちながら研鑽を積むことができた。

7 つの国の民話と音楽に取り組むにあたり、中間発表と自分たちが客観的に振り返る目的を兼ねて動画を制作した。音楽は 2023 年 10 月にふるさと新座館ホールで、民話は 2023 年 10 月から 2024 年 1 月にかけて学内で収録した。動画制作に必要な素材（地図や国旗を加えたサムネイル）づくりにはデザインを得意とする児童教育学科の学生が、Premiere Pro を用いた動画編集の初期設定には社会情報デザイン学科の川瀬基寛教授が協力した。学生たちは撮影・編集をほぼ同時進行させながら、2024 年 2 月 4 日に和光市図書館で開催する「民話と音楽で世界旅行！～図書館から広がる知の冒険～」（十文字学園女子大学、和光市図書館共催）のチラシデザインや、2024 年3月27日に和光市民文化センターサンゼリア小ホールで開催する「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」（十文字学園女子大学、公益財団法人和光市文化振興公社協働主催）に向けた構成を考え、練習用音源等もうまく活用しながらリハーサルを行った。

7 つの国の文化について情報収集する過程で向き合うことになった課題は、選択した作品によりさまざまであった。取り上げた音楽のジャンルや言語によっても課題と解決法が異なるため、具体的な取り組みについて以下に記す。学生が企画制作した各国の民話と音楽の動画は、添付の QR コードより見ることができる。なお、民話についてはグリム童話「ブレーメンの音楽隊」（ドイツ）と同様の話が「ブラッセルの音楽隊」（ベルギー）、「ジャックが幸運を見つけに行くはなし」（イギリス）、「あてのない旅」（日本）のように別の国でも言い伝えられている。イソップ寓話として知られる「王子さまの耳は、ロバの耳」は、本企画ではポルトガルの昔話として紹介さ

れているが、ギリシャ神話に登場するフリギア王国ミダース帝の逸話が元になっているという。亀と鷲の物語も、イソップ寓話として知られている。本企画では矢崎源九郎編『子どもに聞かせる世界の民話』（実業之日本社、1964）を基に読み語りを研究し、動画の公開の際には著作権利用の許諾を得て活動している。

《ブラジル》
民話「カメのこうらはひびだらけ」
音楽「Atirei o Pau no Gato（猫に棒を投げた）」
（ブラジルの子どもの歌）

学生の一人がブラジルの子どもの歌「Atirei o Pau no Gato（猫に棒を投げた）」を父親と子どもが歌う動画を見つけてきた。曲の特徴は、フレーズの最後に来る単語の語尾を子どもが真似して発音する掛け合い歌になっていることである。幼児が言葉を覚える際に、まずは言葉の切れ目で相槌を打ったり、聴き取って覚えた音を繰り返したりするが、そのような言葉を学ぶ過程が歌に組み込まれており、コミュニケーションを楽しむことができる。今回のプロジェクトではできる限り原語で歌うことを目指していたため、早速、子どもが言葉を学ぶように耳で聴きとって真似る形で歌ってみた。音程については楽譜を探して確認したが、わらべうたには歌詞や旋律に地域差やヴァリアンテがあり、探せば探すほど新たな情報が出続けた。“正しい楽譜”を特定することは難しかった。さらに、ポルトガルのブラジル語とブラジルのブラジル語による歌詞の違いに気づいたり、後から付け加えられたと思われる「動物をいじめてはいけない」と教え諭すような歌詞が見つかったりして、調べれば調べるほど様式感が分からなくなった。最終的には歌ったときの自然さを考慮して多くの情報の中から旋律を絞り込み、歌詞を選択した。歌う際には学生同士が役割を分担して、聴く人が掛け合い歌を楽しめるよう演出を工夫した。

《アルゼンチン》
民話「四人の子ども」
音楽「El Humahuaqueño（花祭り）」（E. サルディバル）

アルゼンチンの音楽からは「El Humahuaqueño」を選択した。「花祭り」のタイトルでも知られている曲である。スペイン語の歌詞と旋律が書かれた楽譜を順調に見つけ、Roberto Carlos の音源も参考になった。共演者として棚谷祐一教授（ウクレレ）が参加し、メンバーの特性を生かしたヘッドアレンジ（譜面による編曲ではなく、口頭で進行を決めて演奏すること）をリードした。細谷忠司教授はこの曲に合うケーナを用いて即興演奏にも応じてくれた。少人数でも響きを豊かにするために、トムを叩くバチは左右で違う種類を使うことにした。一定のリズムを刻んでも変化があるのが面白かった。手拍子や足踏みも加えて賑やかにしようと考えたが、歌いながら強拍（足踏み）と裏拍（手拍子）を生き生きとしたリズム感で刻むことは想像以上に難しく、互いに助言をしながら練習が必要であった。

この曲に触れることをきっかけにスペイン語や民族楽器に関心をもった筆者は、「El Humahuaqueño」の歌詞に登場する、アルマジロを共鳴胴に使ったアンデス地方の弦楽器「チャランゴ」や角笛「エルケ」を偶然目にする機会にも恵まれた。関心を持っていると情報が集まってくるものである。

身近なところにはない、触ることの叶わない楽器（チャランゴ、ポルトガルのギターラ）については、音源が添えられた辞典から音色を確認した。発音原理が共通する楽器や、発祥の地が近い楽器を系統的に知ることができ、音楽について辞典で調べる楽しさを味わった。

《ドイツ》
民話「グレーテルとインガ」
音楽「Ich bin ein Musikante（私は音楽家）」
（ドイツ民謡）

「Ich bin ein Musikante（私は音楽家）」は、「山の音楽家」（水田詩仙 日本語詞）の元になったと言われているドイツ民謡である。歌詞の内容は、ドイツのシュヴァーベン地方の音楽家たちがトランペット、ヴァイオリン、ドラム、フルート、ギターなどの楽器を演奏できると歌い、後半でそれらの楽器の音をオノマトペで表すものである。私たちは今回、トランペット、スネア、ピアノ、リコーダーの４種類の楽器を用いることに決め、ピアノの歌詞は筆者がドイツ語で加えた。オノマトペは、原詩ではトランペットが「Tengteng-tereng, tengteng-tereng」、スネアが「Pumpum-perum, pumpum-perum」、リコーダーが「Tütü-tütü, tütü-tütü」となっており、これらの楽器と並べた時にドイツの人が聴いても違和感がないピアノのオノマトペを探す必要があった。これは難易度が高く、「Lalala」で歌おうとしていたところ、日本語通訳としても活躍しているドイツ人アーティスト、Barbara Lohoff さんが「Pling-pling, tam-tam, pling-pling, tam-tam」というオノマトペを提案してくれた。周りの人に助けを求めることで新しい選択肢が見つかり、より納得のいく表現に近づけることができる。表現活動は知りたいという気持ちを原動力に人に聞きに行くなどの行動が伴った時に一段と内容が深まるように思う。

学生たちは原語を覚えて歌うだけでなく、主語が「私」「私たち」と変わるところで役割を交代したり、間奏で楽器を持ち換えたりと身体を動かしながら音楽の特色を生かした表現を工夫していた。このようなオノマトペを伴う民謡は子どもたちが直感的に理解しやすく、遊びながら音楽の諸要素（繰り返し、フレーズ、語感など）を学ぶことができる。

《ウクライナ》
民話「はちみつの好きなキツネ」
音楽「花はどこへ行った」（P. シーガー、J. ヒッカーソン作、おおたたかし日本語詞）

ウクライナ民謡「Kaloda Duda」をルーツに持つ反戦歌「花はどこへ行った（Where Have All the Flowers Gone?）」は、1955 年に P. シーガーが制作し、J. ヒッカーソンが４番と５番の歌詞を書き加えた形が広まった。補完された歌詞は循環する構成でメッセージ性が高まっており、共作として 1961 年に著作権が登録し直されている。筆者と学生は M. ディートリヒがドイツ語で歌った「Sag mir, wo die Blumen sind」や、ピーター・ポール&マリーの英語による録音、複数の日本語詞（おおたたかし、匂坂恭子訳詞）を聴き比べ、自分たちのコンサートでは詞の内容を伝え、来場者と共有できるよう日本語で歌うことを選択した。入手した複数の楽譜は、学生たちの声域に合う調性であるか、日本語詞がオリジナルに忠実であるか、歌とピアノ伴奏が調和しているかの観点で比較した結果、残念ながら全ての要素を満たす資料とは言えず、移調したり、棚谷祐一教授に物語進行に合わせたピアノ伴奏を教わったりして練習を重ねた。合唱を賛助共演してくれる人も現れた。学生が作品や外国の文化について自力で調べるだけでなく、周りの人に企画の趣旨や目指すハーモニーのイメージを説明する力をつけていることも嬉しいことであった。人と協力して一つのものを創り上げる活動が、学生主体で進められていることを実感することができた。

《ポルトガル》
民話「王子さまの耳は、ロバの耳」
音楽「ソナタ　イ長調」（C. セイシャス作曲）

ポルトガルには「サウダード（あるいはサウダージ)」という、外国語に翻訳できない、深い感情を表す言葉がある。「サウダード」とは、今はここにない、失われたものや人に対するノスタルジーと、心にやさしい思い出のことで、それらを再び見たり持ったりしたいという欲望を伴う感情である。学生と筆者は CD を借りて複数の歌手によるポルトガルの歌謡「ファド」を聴いた。ギターラの伴奏に導かれて、憧れやノスタルジーが歌われているように感じたが、皆で演奏できる気がしなかったため、ピアノ独奏でポルトガルの作曲家、C.セイシャス（1704 年コインブラ-1742 年リスボン）の音楽を紹介することにした。楽譜は入手が困難であったため、音楽大学の図書館から借りて選曲した。セイシャスの自筆譜は 1755 年のリスボン大地震でほとんどが失われている。作品は「ソナタ」または「トッカータ」と呼ばれており、一つまたは二つの楽章から成る鍵盤楽器のための作品の写しが残されている。しかし、楽譜の版によって二つの楽章の組み合わせが違っていた。また、セイシャスと同時代に生き、ポルトガルで交流があったと言われる作曲家 D.スカルラッティ（1685-1757)による単一楽章のソナタとの様式の違いに戸惑い、資料の比較検討に時間がかかったが、現代のピアノにも合う親しみやすい作品を選んだ。

日本語の中には、ポルトガル由来のことばがいくつもある。たとえば「パン」、「タバコ」、「コップ」、「(雨合羽の) カッパ」、「(服の) ボタン」、「(楽器の) オルガン」もポルトガル語から来ているという。学校の社会科で学んだ日本と西洋の交易、西洋の思想との出会い、鎖国政策、修好の歴史が活動を通して改めて身近に感じられた。

プロジェクトに取り組む前には筆者がポルトガルの文化に対して具体的なイメージがあまり持てていなかったこともあり、ポルトガル料理を通して地形や気候、風習を知ろうと試みた。現地を知る方から収穫できる作物や、輸入している食材、国民性が分かるエピソードについても話を聞くことができた。料理に使われているアフリカやアジアの香辛料からも、ポルトガルが遠距離貿易の経験を持ち、海外に進出してきた歴史がしのばれた。

《ベルギー》

民話「ブラッセルの音楽隊」

音楽「Panis Angelicus（天使の糧)」(C.フランク)

音楽作品を探す際に最も情報が見当たらなかった国の一つがベルギーであった。現地の子どもが歌う曲を探してプログラムに取り入れようとしたが、調査は難航した。アントワープに留学経験があり現地で子育てをしている人とも交流のあった音楽家に助言を求めたが、ベルギーには三つの公用語があり、“ベルギーの歌”というよりもフランス語の歌、オランダ語の歌が広まっているのではないかとのことだった。民謡やわらべ歌の収集は断念し、C.フランク（1822-90）の名曲「Panis Angelicus（天使の糧)」をラテン語で歌うことにした。ゼミ生が賛助出演してくれる人を募り、4 名による合唱となった。前半は斉唱とし、後半をカノンにして歌ったが、カノン部分を 2 名ずつに分けたところやや張り合うような印象になったため、ピアノ伴奏を担当した筆者も加わり、先行グループを 3 名、追いかけるパートを 2 名とバランスを再調整して立体感を出す工夫をした。日頃のリハーサルにおいて、録音して客観的に聴くことを定期的に行うことで、学生自身が良い点・改善すべき点に気づき、意見を述べ合い、修正することができた。練習に ICT を効果的に活用することで音楽 8 曲、朗読 7 本、演出、印刷物の作成などに並行して取り組むことができた。

コンサート開催に向けてオープニングにふさわしい器楽曲を探していたところ、J.ヴァン＝デル＝ロースト作曲「Arsenal」を見つけ、プログラムに追加することになった。少人数で演奏するにあたり、岡村星見氏よりピアノソロの楽譜を譲り受け、吹奏楽経験のある学生がユーフォニアムを演奏した。スネアのパートはピアノ譜を参考に学生が加え、棚谷祐一教授がバスドラムで響きの厚みを与えてくれた。スネアを担当した学生は今回初めて打楽器に挑戦したため、吉岡理菜氏よりスネアの楽器のしくみと基本的な奏法を習うことにした。脱力してドラムスティックのバウンドを感じる練習から始め、リトミックの手法でリズムを身体で感じ取れるようにしたり、強弱のコントロールを学んだり、ロール奏法が安定

するようにドラムスティックの先端の形をティアドロップ型から初心者に使いやすい丸型に変更したりと一つずつ着実に覚えていき、楽器になじんでいった。個人練習を十分に重ねたら、コンサートで発表する前にもう一度､｢他の楽器の音色と調和する打楽器の奏法」についてレッスンを受ける予定である。アーティストの演奏を間近に見せてもらうことで一つの楽器から出る響きの多彩さや、リズムを感じ取ることができる。よく聴いて真似をすることを繰り返すうちに、楽器と自分の身体の関係への思考が働くようになり、演奏が変わっていく。そのことがさらに練習への意欲を掻き立て、参加者の達成感に繋がっていった。生の演奏に触れることは他の何にも代えられないのだと改めて理解できた。

《ブルガリア》
民話「魔法の笛」
音楽「冬の歌」(H.ネジャルコフ作曲、中山知子日本語詞)

参加者は皆、ブルガリアについての知識が少なく、歌曲の資料を見つけることはできたがキリル文字が難解であったため早々と日本語訳で歌うことに決定した。それでも、ブルガリアの伝統的な女性合唱のCDを聴き、バグパイプの伴奏、ヴィブラートのない力強い歌声、独特のこぶしがきいた表現と不協和音のあるハーモニーを知ることができた。作曲家の湯山昭氏が紹介するブルガリアの合唱曲の楽譜も見つけ、変拍子の音楽「夢見るトドラ」の美しい響きに触れることもできた。

歌曲を中心に調べていくうちに、プロジェクトの参加者全員が小学生の頃に歌ったことのあるH.ネジャルコフ作曲/中山知子 日本語詞「冬の歌」に再会した。「ハイヤハイヤ 原っぱに　鈴の音ふりまいて　小さい橇走るよ　真っ白な道　ズンズンズンズンズンズンズンズン　真っ白な道」という歌詞で親しんでいた歌がブルガリアの歌だったと知り、世界の歌が身近にあったことに驚いた。演奏の際には橇の音をイメージして鈴の音を加え、ピアノが無い場所で歌う時には鈴の即興演奏を前奏とするなど、持ち運びできる楽器の利点を生かした音楽づくりについても意見交換した。

親しみやすい子どもの歌とブルガリアの伝統的な合唱曲について音源や楽譜資料から知り、歌うことができたが、依然として人々の暮らしが想像できなかったため、学生とブルガリアの料理店を訪問することにした。スネジャンカ（ブルガリアのヨーグルトサラダ)、ヨーグルトが添えられたブルガリア風ムサカ（ひき肉とじゃがいものオーブン焼き)、ケバプチェ（皮なしのグリルドソーセージ)、バラのドリンクなど、家庭的でバランスの良い食事を楽しんだだけでなく、ブルガリアに長く住んでいた方から現地の話を伺うことができた。物資が不足していた時代の買い物事情、インフレの状況、2007年のEU加盟前後の変化など書物からだけでは分からない内容もあり、自分たちが情報を集めることにより得た先入観がすぐに覆されるような経験となった。外国の文化を知るには、好奇心を持って行動すること、自分が作り上げたステレオタイプなイメージを人との交流を通して壊し、常に見直していくこと、物事を多角的に見ようと努力することが欠かせない。

以上、本企画で取り上げた７つの国の文化に学生と筆者が触れ、理解しようと努め、イメージを形成していく過程について詳しく述べた。実践の中で向き合うことになった課題は主に、以下の５点であった。

① 資料が手に入りくいこと、入手できても地域差やヴァリアントが多くて判断に迷うこと
（わらべうた、日本語訳詞、自筆譜が残っていない楽譜）
② 原語で歌う難しさ（外国語の文字や発音、オノマトペの語感の理解）
③ 少人数で演奏するための楽器選択とアレンジ
④ 発表形態に合う演目の構成と演出
⑤ 本を読んだだけでは分からない情報を収集して外国の文化に親しむこと

資料収集と判断については、学生の検索能力が高く、何通りかの歌詞や旋律を比較してそのうちの一つを選ぶために必要な知識とセンスを持ち合わせていたため、話し合いによって納得のいく資料を選択

することができた。複数の大学図書館から資料を借りられたことがプロジェクトを大いに前進させたが、ICT を活用して音源や楽譜を見られたことも外国の文化への関心をより高めることにつながった。参加者一人一人がインターネットで集めた複数の情報について自分なりの意見を持ち、他者と対話しながら価値づけていくことで学習活動は活性化した。この経験を学生は教員となった時に授業の中で生かしていくだろう。

外国語で歌うことについては、難しさよりも言葉を通して文化を知りたいという学生たちの好奇心が勝っていたため、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、ラテン語に果敢に挑戦することができた。外国語を勉強するために歌を取り入れることがあるが、文字や発音に慣れるだけでなく、それぞれの文化に根差した「外国語にはそのまま翻訳できない言葉」があることを知ることができたのも良い体験であった。外国語に向き合う中で、他者に対して自分から心を開き、教えてもらうことの大切さを再認識した。学校等においても外国籍の児童の割合が増えている中で、「あなたの国の言葉や文化を教えてください」という姿勢を互いに持つことが相互理解を深めることにつながるだろう。

少人数でもバランよく響くアンサンブルを創り上げることについては、アレンジの専門家である棚谷祐一教授の助言に大いに助けられた。メンバーが演奏したい楽器を生かすこと、音域など技術的に演奏可能で、なおかつ個々の参加者にとって新しい挑戦が含まれていること、楽曲の良さが伝わるように構成にメリハリがあり複数の種類の楽器の音を重ねることによって面白さが出ること――これらの要素を、専門家である教員が予め楽譜にして指示を出すのではなく、音を出しながら選択していくヘッドアレンジの形で経験ができたのも学生にとって有益であり、将来、児童に器楽アンサンブルを指導する際に応用できる知識となる。

本プロジェクトでは公共図書館で民話と音楽によるコンサートを計画した。図書館は静かに本を読みたい人が来る場所でもあるため、事前に楽器を持って図書館を訪問し、館内で出せる音量について確認を行った。図書館ではコンサートの前に約１ヶ月間、関連図書の展示をすることで来場者の関心を高めたいと考えた。文芸文化学科の石川ゼミの協力により、学科を越えた意見交換と連携が可能になり、書籍の展示からも外国の文化に対する理解を深めることができた。

公共ホールにおけるコンサートでは、物語の登場人物になりきって即興演奏をする場面をつくったり（「ブラッセルの音楽隊」）、来場者も民話の一部で声を出せる参加型の場面をつくったりする（「王子さまの耳は、ロバの耳」）など、来場者との距離を縮めるための工夫を考えた。このような案を実際に舞台で経験できるのも、地域連携によりさまざまな専門家から助言を受け、発表の場を得られるおかげである。学生の思考力・表現力を高めるためにも目標を持つことと、自分の考えを表現する段階まで取り組むことが大切である。

書物やインターネットから得られる情報からも十分に心を動かされたが、ある国の生活や国民性が分かるエピソードをよく知る人と会話することは強い印象を残した。食事について調べることで農作物が育つ大地や気候、地形、水質、地域差、食事にかける時間と生活のリズム、食器や住居のデザイン、家事に対する考え方、家庭やレストランでの振る舞い、子どもの躾など暮らしに関するさまざまな話題がついてきて興味深かった。「民話と音楽」を通して外国の文化を知る試みは、食に着目したところ環境・人々の暮らしへと視野の広がりを見せた。

４－２　企画制作に携わった学生の意識調査

学生は小学校、公立図書館、公共ホールにおける発表を目指して世界の民話と音楽について調べ、学内外の人と協働して教科や専門の枠を越えた学びを経験した。学外の人とのかかわりは教職を目指す学生にどのような影響を与えたのだろうか。諸外国の文化や社会に対する意識の変化はあったのだろうか。アンケートの結果は以下の通りである。

《7 つの国の民話と音楽について学んだことによって諸外国の文化に対する意識の変化はあるか》

・その国の衣食住や伝統の文化、音楽性を通して世界がいかに多様であるかを実感したとともに、自分が担任した学級に諸外国に国籍を置く児童や諸外国とのハーフの児童などがいた場合、距離を

縮められるきっかけになると感じた。意識の変化としては、今までは日本の文化しか知らなかったので（知ったとしても社会科の範囲）、知らない部分を知って感じた意外性から、様々な国の文化を知りたいという意識を持った。
・７つの国の文化を知るために本を読んだり、料理を作ったり、音楽を聴いたりした。このような行動をした結果、元々持っていた国のイメージとは異なることもあり、物事を決めつけるのではなく、様々な方法で調べたり、人に聞いたりすることでさらに物事の魅力や良さに気づくことが出来るということを学んだ。

《7 つの国の民話と音楽について学んだことによって社会に対する意識の変化はあるか》
・他国籍の児童生徒が増えているので、その児童生徒に寄り添うためにも諸外国の文化を知り、在籍している学級や学校などに広めるための知識を持とうと意識が変化した。社会に対しては、グローバル化が進む中でまだ外国の文化や宗教が日本で受け入れられていない気がしている。例えば、イスラム教と聞いて怯えてしまう人が多いと思うが、自ら調べてその中にも宗派があることを知り、イスラム教全てが悪いことをしているわけではないことを知るように先入観を捨て、その国の文化の根底を知る意識を持とうと思った。
・他の国について学ぶことは、総合的な学習の時間や外国語の授業でしかできないと思っていたが、今後、現場で教えることになった時に教科横断的に外国の文化について教えることができると思った。

《小学校、公共施設における活動で学んだこと・考えたこと》
・小学校における読み聞かせ体験、公共施設との協働プロジェクトを通して、どちらも沢山の方が携わっていることを感じた。また、発表者やステージに立つ人だけが目立つ仕組みに少し疑問を抱いた。舞台技師さんなどの名前は動画の字幕では紹介されるが、その人がどんな方なのかが分かる工夫を施せるとよいと考えた。
・小学校での読み聞かせでは、実際の子どもたちの反応に触れ、絵がない朗読の難しさを感じた。絵がないため、想像する時間を設けなくてはいけないことがわかった。そのため、気持ちゆっくり朗読をして、情景が浮かんでから物語が進むように読んでいく。
・ホールとの協働では、コンサートを行うにあたりたくさんの方の協力が必要だと思った。そのため、協力を仰ぐために打ち合わせの前には念入りにどういうものを行うのか固めておくことの重要さに気づいた。また、協力してくださった方への感謝を忘れず、いいものをつくっていくという気持ちが必要不可欠であると感じた。

《他学科の教員や職員、アーティストとの交流で学んだこと・考えたこと》
・児童教育にフォーカスを当てていない考え方に触れることができ、改めて考え方の多様性を学ぶことができた。また、楽器の講習会や歌唱の講習会では大人が大人に教えるときと大人が子どもに教えるときの違いについて考えることができた。
・ゼミの活動を行う前は、他学科の先生と関わることが少なかったので貴重な機会だと思った。音楽や映像をサポートして頂き、リズムのとり方や、動画編集の仕方まで普段の学校生活では学べないことを知ることができた。他の活動でも他学科の先生との関わりをもう少し持てたらよいと思った。
・プロの世界で活躍されているアーティストにご指導頂き、知識はもちろん、技能も向上して良い経験になった。スネアの音楽的な演奏の仕方や歌う時の呼吸の使い方など、プロの方からではないと学べないことを学べた。

《目指す教師像》
・一人一人の児童生徒の特性を伸ばすことができる教師。
・児童の個性を認め、児童とともに成長していける教師。

世界の民話と音楽を通して学内外の人とかかわってきた学生の記述からは、世界は多様であることに気づき、諸外国の文化に対して先入観を捨てて、深く知ろうとする意識が芽生えたことがわかる。外国の文化に触れ、進んで他者と交流しようと行動した経験は、学生が将来、教職について日本以外の国にルーツを持つ児童や家族と関係を築き、児童同士が

互いに相手の文化に関心を持つ学級・環境をつくる際に生かされると考えられる。

諸外国の文化に親しむための方法として、言葉を学ぶこと（外国語で歌うことを含む）、街並みや人々の暮らしの映像を見ることはイメージを喚起しやすく、文化に触れあうきっかけとして良いだろう。さらに、食を通して地形、気候、特産物、貿易、経済、歴史、日常生活について知ったり、現地で暮らした経験のある人にインタビューしてそれぞれの国の人たちのメンタリティーが現れるエピソードを聞いたりすることで、自分の中でつくられた先入観が壊され新たなイメージがつくられていく。そのような経験を重ねることで、もっと知りたいという意識が芽生えるのだと思う。簡単に情報が手に入る時代だからこそ、「まだ知らないことがある」「実際はどうなっているのだろう」という知的好奇心を保つ必要がある。自ら確かめようとする態度を失わないことが、情報を適切に判断し、情報を通じて決定を下す能力を高めることにつながるだろう。このように、知識だけでなく判断する力も教科や分野を限定しない総合的な学習によって向上させることができ、学生の活動と振り返りから、それらが人との直接的なかかわりによって高まることがわかった。

５．おわりに

学内外の方から支援を受け、教職を目指す大学生と共に「民話と音楽で世界旅行！～みんなで楽しむ七色の文化～」を企画し、約 10 ヶ月間にわたり 7 つの国の文化についての調査と公演準備を経験した。2024 年 3 月には本学と公益財団法人和光市文化振興公社の共催で和光市民文化センターサンアゼリアにて成果発表を予定している。学生は、小学校の先生方や児童、教育委員会や音楽ホールの関係者、音楽マネジメントのプロやアーティスト、技術者、図書館を運営する人、専門分野が異なる教職員・学生などさまざまな人とのかかわりを通して視野を広げ、情報を集め、理解したことを自分の中で深化させている。学生の振り返りから、研究テーマを自ら選択して教科横断的に存分に探求し、地域連携によって幅広い年代の人と意見交換しながらさらに関心を深めていることが分かった。正解が一つではない学びは好奇心を呼び起こす。学生自身が問いを見いだし、課題の解決法を考える学修活動が広がるよう、筆者自身も視野を広げて人との連携を大切にしたい。

参考文献

・矢崎源九郎編『子どもに聞かせる世界の民話』、実業之日本社（1964）
・江波戸昭『世界の民謡めぐり』、日本書籍株式会社（1992）
・石橋純『中南米の音楽―歌・踊り・祝宴を生きる人々』、東京堂出版（2010）
・Peter Hollfelder, Die Klaviermusik, Nikol（1999）
・吹浦忠正『世界の国旗図鑑』、主婦の友社（2020）
・稲田浩二編集代表『世界昔話ハンドブック』、株式会社三省堂（2004）
・池辺晋一郎他監修『小学館の図鑑 NEO　音楽』、株式会社小学館（2023）
・麻生雅人・山本綾子編著『ファッションから食文化までをめぐる旅　ブラジル・カルチャー図鑑』、スペースシャワーネットワーク（2012）
・銀城康子文、マルタン・フェノ絵『ドイツのごはん（絵本 世界の食事６）』、農山漁村文化協会（2008）
・アルベルト松本『アルゼンチンを知るための 54 章』、明石書店（2005）
・アンジェロ・イシ『ブラジルを知るための 55 章【初版第 4 刷】』、明石書店（2004）
・ダニエラ・ニコロバ監修、吉田忠正 文・写真『体験取材！世界の国ぐに 33　ブルガリア』、株式会社ポプラ社（2008 年）
・仁平尊明監修『新・世界の国々7　南アメリカ州』、株式会社帝国書院（2020）
・ウィリー・ヲゥーパー『リアル・ブラジル音楽』、ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス（2015）
・ピート・シーガー著、矢沢寛監訳『虹の民におくる歌―「花はどこへいった」日本語版』、社会思想社（2000）